日蓮大聖人御書全集

王舎城事（おうしゃじょうじ）

新版 1545〜1548

王舎城事

文永12年（'75）4月12日　54歳　四条金吾

銭一貫五百文、給び候い畢わんぬ。

焼亡のこと委しく承り候こと、悦び入って候。

大火のことは、仁王経の七難の中の第三の火難、法華経の七難の中には第一の火難なり。

夫れ、虚空をば剣にてきることなし。水をば火焼くことなし。聖人・賢人・福人・智者をば火やくことなし。例せば、月氏に王舎城と申す大城は、在家九億万家なり。七度

まで大火おこりてやけほろびき。万民なげきて逃亡せんとせしに、大王なげかせ給うことかぎりなし。その時、賢人ありて云わく「七難の大火と申すことは、聖人のさり、王の福の尽くる時おこり候なり。しかるに、この大火、万民をばやくといえども、内裏には火ちかづくことなし。知んぬ、王のとがにはあらず。万民の失なり。されば、万民の家を王舎と号せば、火神、名におそれてやくべからず」と申せしかば、さるへんもとて、王舎城となづけられしかば、それより火災とどまりぬ。されば、大果報の人をば大火はや

かざるなり。

これは国王（こくおう）すでにやけ（焼）ぬ。知（し）んぬ、日本国（にほんこく）の果報（かほう）のつく（付）るしるし（徴）なり。しかるに、この国（くに）は、大謗法（だいほうぼう）の僧等（そうとう）が強盛（ごうじょう）にいのり（祈）をなして日蓮（にちれん）を降伏（ごうぶく）せんとする故（ゆえ）に、いよいよわざわい（災）来（きた）るにや。その上（うえ）、名（な）と申（もう）すことは体（たい）を顕（あらわ）し候（そうろう）に、両火房（りょうかぼう）と申（もう）す謗法（ほうぼう）の聖人（しょうにん）、鎌倉中（かまくらじゅう）の上下（じょうげ）の師（し）なり。一火（いっか）は身（み）に留（とど）まりて、極楽寺（ごくらくじ）焼けて地獄寺（じごくじ）となりぬ。また一火（いっか）は鎌倉（かまくら）にはなち（放）て、御所（ごしょ）やけ（焼）候（そうら）いぬ。また一火（いっか）は現世（げんぜ）の国（くに）をやきぬる上（うえ）に、日本国（にほんこく）の師弟（してい）ともに無間地獄（むけんじごく）に堕（お）ち

て、阿鼻（あび）の炎（ほのお）にもえ（燃）候（そうろう）べき先表（せんぴょう）なり。愚痴（ぐち）の法師等（ほっしとう）が智慧（ちえ）ある者（もの）の申（もう）すことを用（もち）い候（そうら）わぬは、これ体（てい）に候（そうろう）なり。不便（ふびん）、不便（ふびん）。先々御文（さきざきおんふみ）まいらせ候（そうら）いしなり。

御馬（おんま）のがいて候（そうら）えば、またともびきして、くり毛（げ）なる馬（うま）をこそもうけて候（そうら）え。あわれ、あわれ、見（み）せまいらせ候（そうら）わばや。

名越（なごえ）のことは、これにこそ多（おお）くの子細（しさい）どもをば聞（き）こえて候（そうら）え。ある人（ひと）のゆきあい（行遭）て、理具（りぐ）の法門自讃（ほうもんじさん）しけるを、さんざん（散々）にせめ（責）て候（そうら）いけると承（うけたまわ）り候（そうろう）。

また女房の御いのりのこと、法華経をば疑いまいらせ候わねども、御信心やよわくわたらせ給わんずらん。如法に信じたるようなる人々も、実にはさもなきことども、これにて見て候。それにも知ろしめされて候。まして女人の御心、風をばつなぐともとりがたし。御いのりの叶い候わざらんは、弓のつよくしてつるよわく、太刀・つるぎにてつかう人の臆病なるようにて候べし。あえて法華経の御とがにては候べからず。よくよく念仏と持斎とを我もすて、人をも力のあらんほどはせかせ給え。譬えば

左衛門殿(さえもんどの)の人(ひと)ににくまる〔憎〕がごとしと、こまごまと御物語(おんものがた)り候(そうら)え。いかに法華経(ほけきょう)を御信用(ごしんよう)ありとも、法華経(ほけきょう)のかたき〔敵〕を、とわり〔遊女〕ほどにはよもおぼさじ〔思〕となり。

一切(いっさい)のことは、父母(ふぼ)にそむき〔背〕国王(こくおう)にしたが〔従〕わざれば、不孝(ふこう)の者(もの)にして天(てん)のせめ〔責〕をこうぶる〔被〕。ただし、法華経(ほけきょう)のかたき〔敵〕になりぬれば、父母(ふぼ)・国主(こくしゅ)のことをも用(もち)いざるが、孝養(こうよう)ともなり、国(くに)の恩(おん)を報(ほう)ずるにて候(そうろう)。

されば、日蓮(にちれん)はこの経文(きょうもん)を見(み)候(そうら)いしかば、父母(ふぼ)手(て)をすり〔摺〕てせいせし〔制〕かども、師(し)にて候(そうら)いし人(ひと)かんどう〔勘当〕せしかども、

鎌倉殿の御勘気を二度までかぼり、すでに頸となりしかども、ついにおそれずして候えば、今は日本国の人々も道理かと申すへんもあるやらん。日本国に国主・父母・師匠の申すことを用いずして、ついに天のたすけをかぼる人は、日蓮より外は出だしがたくや候わんずらん。これより後も御覧あれ。日蓮をそしる法師原が日本国を祈らば、いよいよ国亡ぶべし。結句、せめの重からん時、上一人より下万民まで、もとどりをわかつやっことなり、ほぞをくうためしあるべし。後生はさておきぬ、今生に法華経の敵となりし人を

ば梵天・帝釈・日月・四天罰し給いて、皆人にみこりさせ給えと申しつけて候。日蓮、法華経の行者にてあるなしは、これにて御覧あるべし。

こう申せば、国主等はこの法師のおどすと思えるか。あえてにくみては申さず。大慈大悲の力、無間地獄の大苦を今生にけさしめんとなり。章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。こう申すは、国主の父母、一切衆生の師匠なり。事々多く候えども、留め候いぬ。

また麦の白米一だ、はじかみ送り給び候い畢わんぬ。

日蓮　花押

卯月十二日

四条金吾殿御返事